

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 岩下 聡
編集 同 広 報 部

【巻 頭 言】

半世紀の時をこえて

福島市立福島第二小学校長 伏見 珠美

今年は、例年になく大雪と新型コロナウイルス感染症の予断を許さない感染状況に年明けから気持ちが暗くなりがちであったが、とてもうれしい出来事があった。

小学校2年生の時の担任の先生にお目にかかることができたのだ。半世紀ぶりである。半世紀という言葉は何気なく使っているが、その長さを実感することとなった。

きっかけは、第二小学校へ転勤し福島市第二地区社会福祉協議会が発行している「第二地区いきいきだより」に寄せた原稿を先生がたまたま目にされたことによる。顔写真も一緒に掲載されていたので、「たぶん小学校の時担任した珠美さんに違いない。」と思われて連絡をつないでいただき、お会いすることができた。それぞれに半世紀の年月を重ねているわけだが、当時の話を始めると次から次へと思い出すことが出てきて、あっという間に時間が過ぎてしまった。

先生は、今でいうと新採用の立場で2年生の私達を担任したこと、毎日指導案を書かなければならず大変だったこと、学習発表会のダンスの練習で学年以上の難しい内容に挑戦してしまったこと、などをこやかに話された。何を隠そう、私は先生の笑顔にあこがれて学校の先生を志したのである。先生にそのことをお伝えしたら、とても喜んでくださった。自分も同じ職業に就いたからこそ、当時の先生のご苦労が分かる。しかし、子供心に先生はいつも笑顔を絶やさず、私たちの話を最後まで聞いてくれた。叱られたこともあったが、諭すように話してくださり、大声を出すことはあまりなかった。(都合の悪いことは忘れてはいるかもしれないが)

この再会は教職を志した原点を振り返るきっかけを与えてくれた。同時に自分は心配なことがあっても元気に明るく子どもたちの前に立っているか、を自問している毎日である。

書で人とつながる

福島市立清水小学校長 松野 光伸

最近、私の所属する書道団体の冊子を作成するにあたり、担当の先生に原稿の依頼に伺ったときの話である。原稿依頼の件がひとまず終了し、ある共通の上司の先生の話になった。以前私は、その上司の先生が校長を務める小学校の卒業証書の揮毫依頼を受け、私なりに心を込めて揮毫した。そのことを話すと、「多分、その時のその小学校の卒業担任が私です。」と嬉しそうに話してくれた。県内の遠く離れた小学校の卒業証書の揮毫が縁で、実に十数年の時を経て、書を通して人とつながることができた出来事であった。

思い起こすと、以前、南会津に単身赴任していたときに、地元の郵便局長さんから郵便局に飾る書の依頼があった。同じ大学出身の先輩ということで断れなかった(笑)こともあり、隷書体で「伊南」と揮毫した。その作品は、今でも郵便局の入口に飾っていただいている。

また、町の文化祭では、地元の書道愛好家の方と一緒に書のワークショップを開いたり、ご希望の言葉をはがきに揮毫してプレゼントしたりして、喜んでくださる方々の笑顔を見て、ささやかではあるが、地元の人とつながることができた。

本校においても、書に関心のある教員の協力を得ながら、筆字で「合奏部県大会出場」という文字を掲示したり、児童がコンクール用に書いた半切の作品を表具して額装し、子どもたちや保護者、先生方に見てもらえる機会を設けたりして、書を通して関心をもっていただき、みんなの励みになるような働きかけをしているところである。

ところで、蛇足ではあるが、私は毎年、干支の文字をはがきに揮毫しており、私のライフワークとなっている。今年は「寅」年、すでに書き終えているが、「卯」年から始めたのでちょうど十二支で一回りしたことになる。これからも書で人とつながっていけたら幸せである。

教職員が一つになる

福島市立東湯野小学校長 瀬戸 和子

子ども以外で毎日学校にいるのは、教職員です。子どもたちの健やかな成長を促す教育活動推進に向けて、その教職員が最大の力を発揮するためには、「一つになる」ことが大切です。

【共通理解、共通実践】「どの先生も自分を大切に思ってくれている」「どの先生に話しても大丈夫」と子どもが思えるように、一人一人の児童について全員が知り、愛情をもって同じ指導を行うこと。課題解決に向かって、ベクトルを同じにして取り組むこと。

【補い合うこと】ある先生は子どもの話を聞くことが上手、ある先生はICTに長けている、また、ある先生は…。一方、授業案を書くのが少し苦手、体調を崩しやすい…。どの教職員にも、強みと弱みがあります。「先生ちょっと教えて。」強みは分けてもらい、「それやっておくよ。」弱みに対しては、他の教職員が力と時間を少しずつ分け与えること。それは、「お互い様」なこと。

【「先生たちは仲がいいね」】子どもたちの前で、教職員が互いを認め合い協力し合う姿を見せる。宿泊学習のキャンドルファイヤーでは、先生のスタンプも飛び入り参加。「先生たちも練習していたの!？」サプライズに子どもたちのはじける笑顔。

【一緒に笑う】放課後のひととき、楽しい話題で盛り上がる。30代から60代までの幅広い年齢層が、一緒に笑う心地よさ。そのとき、おいしいスイーツなんてあったら、最高です。

東湯野小学校は、令和4年3月末を以て147年の歴史に幕を下ろします。1月11日、最後の始業式では、「147年の仕上げは全校生14人の笑顔で!」を掲げました。子どもたちが、安心して心からの笑顔を咲かせることができるように、保護者の皆様、地域の皆様にご理解とご協力をいただきながら、教職員が一つになって取り組んでおります。

日常的に学び合う文化を

福島市立三河台小学校長 山本 巖

本校では、理科・生活科を研究の柱として実践に取り組んでいます。理科を専科指導とすることが多い中、理科授業を学級担任が行っている今の伝統は今後も引き継いでいきたいと考えています。

その一方で、学級担任が理科の指導に難しさを感じていることも確かです。

そういった難しさが少しでも軽減できるように、研究授業は学年でサポートし合う体制をとっています。研究授業当日が近づくと、放課後に理科室でベテランと若手が板書事項や実験・観察器具の扱い方について熱心に話し合っている姿をよく目にします。

そのような時には、すぐに話し合いに参加するようにしています。問題解決の過程では、解決する必然性のある「問い」をもつことが大切です。どうすれば「解かないではいけない」状況を作り出すことができるのか、先生方と議論をしている時間はあっという間に過ぎていきます。

研究授業が行われた日には、授業者と授業について語り合う時間を必ず設けます。授業者の都合のよい時間に合わせて校長室で行い、以下のことを話題にしています。

- 研究授業に対する取組への感謝
- 教材のもつ価値
- 子どもたちの思考の流れ
- 認識のずれはあったか

授業に対する取組への感謝については、研究授業当日まで放課後等に準備をする中での苦労話を伺うとともに、次への意欲が高まるように心がけています。また、教材のもつ価値及び子どもの思考の流れや認識のずれを授業者がどう捉えていたかを共感的に理解することを大切にしています。

このように、研究授業を通して日常的に学び合う文化をしっかりと継承していくことが大切であると考え日々取り組んでいます。

ふるさとを学びに

福島市立渡利小学校長 阿部 貴史

今年度、本校に着任して間もない日のこと。新年度の準備に熱心に取り組んでいたある先生が、「時間の合間をみて、子どもたちの菜の花の様子を見に行ってもいいですか。」と尋ねてきました。聞いてみると、昨年度、支所が進めている地域活性化事業に、学年の子どもたちと参加し、花見山公園に至る沿道に菜の花を植えてきたとのこと。その花の様子を確かめに行きたいとのことでした。本校の学区内には、福島市の名所、花見山があります。本校の子どもたちにとって、地域について知る素晴らしい学習素材といえます。その先生によると、学習を通して花見山の素晴らしさや、地域の方による努力を知った子どもたちは、「自分たちが植えた花で、花見山を訪れる人たちに喜んでもらおう。もっと多くの人に足を運んでもらおう。」と、願いを胸に苗を植えたそうです。本校には、花見山のほかにも、弁天山、阿武隈川など魅力的な学習素材が数多くあります。特に学校そばの河畔は「渡利水辺の楽校」として整備され、地域の憩いの場になっており、地域で組織されている「水辺の会わたり」の方々で維持管理に尽力されています。子どもたちは、例年、会員の皆さんの連携・協力のもとで、川の水質調査や水辺の野鳥観察を行ってきました。この2年間はコロナ禍のため実施できていませんが、寄贈いただいたサケの稚魚を校内の水槽で飼育し放流する活動も行ってきました。年によっては、サケの遡上観察も行えたそうです。本校には、このような渡利地区の豊かな自然、人のつながり、歴史文化を取り入れ、ふるさとについて学びを深めていこうとするテーマ学習が続けられています。これまでの学習を礎に、近年のSDGsの視点からも本校の学びがさらに深まり広がるのが期待できます。

今後も渡利小学校の伝統そして特色を最大限に生かし、これからの世界を担う子どもたちを、地域の方たちと共に育てていきたいと思えます。

自ら学んで、伝える

福島市立福島第四小学校長 丹治 秀樹

多くの先輩、同僚との出会いの中で教員としての道を歩んできたが、残念ながらこの1月にご逝去された故鈴木信光校長先生(元福島三小校長)からは、学ばせていただいたことが数多くある。

平成11年度。私は、信光先生(敬意を込めて信光先生と呼ばせていただく)が定年退職となる最後の1年をご一緒できた。その年から研究開発学校として新しい「総合的な学習の時間」に取り組むことになっていたが、着任前の3月下旬、挨拶のため学校にお伺いした際、信光先生自らが作成した膨大な資料を渡されて驚いたことは、当時の仲間の語り草である。「総合」とは何かも分からない教員がほとんどの中、全国の実践を集めて参考にしながら研究の礎を作られ、その後の道筋を示されたことは、校長としての見事なリーダーシップであったと感服するばかりである。

当時、信光先生がよく言われた言葉に「よい問いはよい答えにまさる」がある。総合の授業の中で子どもたちが大人にインタビューする際、意味あることを聞き出せるかどうかは質問の質にかかっているということ。同時にこれは、授業での教師の発問の質も言及した言葉である。このように授業の基礎・基本から教材研究の仕方、文書の言葉の遣い方まで、校長時代もご退職後も幅広くご指導をいただいた。多くの書籍を読まれ、「知の総合化」「読解力・活用力」「考える授業」等、8~9ポイントの小さな文字で緻密な資料にまとめられて後輩たちに示された。時代の新たな教育課題を自ら学んで解釈し、不易の指導技術とともに後輩に伝える、人材育成に努められた偉大な先達であった。

時は流れ、間もなく私も最後の年である。「丹治さん、読解力育成のために校長は先生方に何を伝えていきますか。」とあの低く太い声が聞こえてくるようである。校長として信光先生のような威厳も品格も教養もないが、自分も最後まで学んで伝えなければと心新たにしたこの春である。

子どもを観る力

川俣町立川俣南小学校長 荒川 修

全校生で行うふるさと学習の一つとして、川俣町と二本松市東和にまたがり、南小学区にかかる口太山(標高842.6m)へ登りました。下学年と上学年の2つに分けたルートで実施しました。下見をした際、下学年のルートであっても、私にとっては十分すぎる難所でした。

当日。勿論、私は下学年のルートで参加です。

1年生はドングリや松の実を拾いながら楽しそうです。いがの中の栗の実に目をやり「中が3つに分かれている。」と驚きの声を上げています。

2年生は途中の見晴らしのよい休憩場所に着くと、大きな声で「ヤッホー。」と遠くの山に向かって呼びかけています。その後、そろって楽しそうに歌を歌いながら、また登り始めました。

3年生は木漏れ日を見て「あそこだけ光が当たってきれい。光がまっすぐ伸びている。」と足を止め、じっとその光を見つめています。

実は、1年生は生活科でアサガオを育て、できた実の中がどのようにになっているかに関心をもち、中の種が薄い壁に覆われて2個ずつ並んで入っていることを学んでいました。

2年生は音楽の音の強弱の変化とその働きが生み出すよさや面白さ、美しさを考える題材で「やまびこごっこ」を学習していました。

3年生は理科の「太陽の光を調べよう」の学習に入ったばかりでした。

同じ山道を登りながらも、それぞれの学年の学びによる、それぞれの姿でした。

教師が意図していない場でも学びが活用される場面は様々あります。その姿に教師が気づき、価値づけてやれるかどうかで子どもは変わります。

子どもの姿をもとに、それまでの学びと関連づける話を先生方とするように日頃から心がけています。(先生方に身構えられないようにソフトに)

その積み重ねが教師の「子どもを観る力」を高める一助につながると信じて。

ほめる

福島市立蓬萊東小学校長 渡邊 裕樹

「青春時代にいくつほめられたかで、

人間の人生は決定するような気がする」

12月の福島地区小・中学校長協議会研修会で元福島市教育委員会学校教育課長の鈴木昭雄先生がお話された内容の一部である。

本校では、全教職員で「ほめる」ことに取り組んでいる。担任も他の学年の教員も子どもたちのよい行いを見付けたら「ほめる」。管理職も担任外の教職員も「ほめる」。そして担任に伝える。保護者に伝えることもある。

道徳科の授業が終われば事後指導の段階である。別業なども活用し、道徳的行為が表出しやすい実践の場が用意されている。子どもたちの行いを道徳的価値に照らして意味付けし、「ほめる」。個々に「ほめる」こともあれば、あえて全体の前で「ほめる」こともある。このような姿を見ていると、やはり担任が道徳科の授業をすることには大きな意味があると感じさせられる。

今年度まで、学校目標の具現に向けて、実践事項として全職員で取り組んできた。先日の教育課程の話合いのなかで、次年度からは重点実践事項として一層取り組んでいきたいという話が担当分科会から提案された。冷静なふりをしてしたが、正直とてもうれしかった。

最近、教職員間でもそんな姿が見られることが増えてきた。管理職だけではなく、同僚間でも、先輩後輩の間でも、「称賛」や「感謝」の声がよく聞かれる。見ていてとても気持ちがいい。

ほめられたら悪い気はしない。ほめられたいからかもしれないが、いろいろなところでがんばる子どもたちの姿を多く見かける。それはそれでよいのではないかと思う。

いつの日にか、習慣化し当たり前のこととして自然な行いになる日が、そして周囲の人を「ほめる」ことができるようになる日がくることを信じている。

胸熱のパラリンピック

福島市立飯坂小学校長 逸見 健二

私の趣味はスポーツ観戦である。昨年、開催されたパラリンピックの開会式(D席)と陸上競技(A席)のチケットは当選していたので、観戦をとっても楽しみにしていた。特に、400m(視覚障害T13)に出場する東邦銀行の佐々木真菜さんをスタジアムから応援することを楽しみにしていた。私が庭塚小に勤務していた当時、彼女は5年生で、市小学校陸上競技大会の800m走に出場するため、放課後、実に熱心に練習に取り組んでいた姿を鮮明に覚えている。コロナ禍のため、オリ・パラは延期の末の無観客開催になってしまったので、彼女の雄姿をテレビの画面越しに応援することになったが、障がいと向き合いながら、パラリンピックに出場するまでの並々ならぬ努力、諦めない心、汗と涙を想像し、胸が熱くなった。

今回のパラリンピックでは、陸上競技のほか、ボッチャ、水泳、車いすバスケットボールなど多くの競技を通して、パラアスリートたちの多様性、逆境に立ち向かう力に勇気をもらい、心から感動した。また、「違いが輝く」世界のすばらしさ、共生社会や多様性などを発信したパラリンピックの果たした役割は実に大きいものであったと感じた。

パラリンピックで発信された個々の多様性を認め合い、すべての人々が輝き、活躍できる共生社会の実現に向けては、学校において、インクルーシブ教育システムの構築は不可欠であり、そのためには、校長のリーダーシップのもと、特別支援教育を確実に推進していく必要がある。

福島地区小学校長会の信陵・飯坂方部の令和4・5年度の研究分担は、「自立と社会性」(子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進)である。特別支援教育を推進するための校長の果たすべき役割と指導性について、方部の校長先生方とともに、実践研究を進めていきたいと考えている。

風を感じて

福島市立福島第一小学校長 横山 貴英

「風を感じて」なんて言い方は、気恥ずかしいが、他に思いつかない。学生時代以来、およそ30年の時を経て再びバイクに乗り始め10年になる。気候・天気がいい日限定で、主に近郊をトロトロ走り回る。

白く花咲く梨畑や芽吹く広葉樹の遠く向こうにまだ雪が残る吾妻山を望みつつワインディングロードを走る。青い空に白い雲のコントラストが映える暑い夏の日、山間をぬって摺上ダムまで走る。紅葉が始まる爽やかな朝、安達太良に向かう道を走る。その折々に、風と共に感じることもある。

葉の花の香りだったり、急に谷側から流れ込んでくるひんやりとした空気だったり、頭上のトンビや森の中からの山鳩の声、もみ殻を焼く煙の匂い、時にはどこの家か知らないが夕餉のカレーの匂いも……。すると、それに触発されたように忘れかけていた出来事が「ああ、こんなことがあったな。」と自然に思い浮かんでくる。

新聞のコラムで、臭覚は五感の中で唯一大脳の喜怒哀楽などをつかさどる部分とつながっているため、特定の匂いを嗅いだ時に、懐かしい思い出や当時の感情が呼び起こされる現象があり、これを「ブルースト効果」ということを知った。納得するとともに、聴覚(音楽)や触覚(空気感)もそうではないのかなとも思う。思い出がセットのようにかかわっている経験が少ないからだ。

マスク生活が当たり前となり、ICTが急速に日常に入りつつある中で、機器による映像や音声だけではなく、実際にその匂いや音や空気を肌で感じることの大切さを改めて思う。これからの時代を人間性豊かにたくましく生きていく子どもたちの成長には、実際の体験を通して、存分に「感じる」ことが重要だろう。そう思いつつ、車での移動でもなるべく窓を開けるこの頃である。

S O U

川俣町立富田小学校長 小松 浩行

「時速7.5km」これは、私が日課としているジョギングのスピードである。かなりゆっくりであるが今の私にはこのスピードがピッタリ。日課と述べたが、毎日、朝と晩の2回ジョギングをしている。2回走らないと気分が悪い。平日はそれほど距離は走らないが、休日になると1回のジョギングで10km程度走る。時間になると1時間20分になる。

休日になると長い距離を走ることができるのはその後に楽しみがあるからである。それはスーパー銭湯でのサウナと水風呂。コロナの感染状況も落ち着いてきた(12月執筆時点)ので休日は出向いている。私の住まいの近くにあったスーパー銭湯がなくなってしまったので、車で1時間かかる所へ行く。なぜか遠くには感じない。ワクワクしているからであろう。「サウナ⇒水風呂」を繰り返す。脱水で脚がつかれるほど入るときもあるが、サウナ後の水風呂はまさに天国である。以前この誌で、ある校長先生が「整う」を紹介していた。この「整う」が私にとってストレスを発散する瞬間で、爽快感を体全体で感じている。

「走」(S O U)はこの年齢になると苦しいときもあるがサウナ後の「爽」(S O U)を求め、ひたすら走っている。「走」の最中に仕事のアイデアが浮かぶことが多々ある。「想」(S O U)の時間でもある。「想」をしながらの「走」は距離や時間を短く感じさせてくれる。

「S O U」が私に与えてくれるものは大きい。自分自身を良い方向に「操」(S O U)作してくれるルーティンのようなものである。これからの人生もたくさん「S O U」を頼りにして、ストレスを解消し、笑顔で子どもたちの前に立っていきたいと思う。続けるのは、そう(S O U)簡単では無いと思うが…。

今年度の活動を振り返って

福島地区行財政部長

福島市立矢野目小学校長 古田 幸裕

今年度の福島地区小学校長会行財政部は、年度当初に示した方針と計画に基づいて、人事の反省及び調査研究を実施し、要望活動等における根拠となる資料の作成に大きな役割を果たしてきました。以下に本年度の調査とその結果の概要をお示しします。

【令和3年度人事の反省】

- 優秀な人材を確保するための勤務条件の運用の工夫及び処遇改善
- 管理職の多忙化の緩和を含めた管理職をめざす環境づくり
- 特別支援教育に関わる人的環境の充実

【行財政調査Ⅰ 教職員配置等調査】

- 少人数教育の実態に応じた効果的な活用
- 復興推進加配をはじめとした加配措置の継続
- 教育相談充実のためのSCやSSWの配置の継続

【行財政調査Ⅲ 教育施策実施状況調査】

- 学習及び生活双方に大いに効果がある少人数教育の継続
- I C T環境の整備及び教職員の研修の充実
- 外国語科及び外国語活動を効果的に進めるための人的配置

【特別調査 大震災・原子力災害や感染症の影響調査】

- 健康の保持及び学びの保障のためのスクールサポートスタッフの継続配置
- 防災教育や放射線教育の指導充実に向けた震災遺構の研修の位置づけ

行財政部の活動は地区中学校長会とも連携し、県小学校長会と足並みをそろえて進めています。今年度はニーズ研修を「働き方改革」とし、各校の日課表や関係機関との連携について共有化を図り、改革の自校化を促進してきました。今後とも行財政部の活動へのご指導とご協力をよろしくお願いします。

編集後記

冬の寒さに堪え忍ぶ木々のかたい芽に共感しながら「春遠からじ」と思う毎日です。

広報福島第4号発刊にあたり、玉稿をお寄せいただいた校長先生方に心より御礼申し上げます。

福島市立鳥川小学校 島田 祥司